



るるるる



2022年
12月
No.900

■発行所■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■ウェブサイト■ <https://jelc.or.jp/>
■E-mail■ jelc@jelc.or.jp

■発行人■ 李 明生 koho@jelc.or.jp
■印刷人■ 精文堂印刷株式会社
■定 価■ 1部 40円 (郵税を含む)
■振替口座■ 00190-7-71734

説教 「神の業に招かれる」

日本福音ルーテル帯広教会 牧師 岡田薫

「天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になつていく。神にできないことは何一つない。」

(ルカによる福音書1章35〜37節)



「聴く」

伊藤早奈



「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである、その人の手を慰められる。柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(マタイ5:3〜10)

「あなたの聖書朗読からあなたの信仰が聴こえる」と今回あげた聖句をお読みした時言われました。丁度言葉のスピードが遅くなり、また病気が進行したのかと心配していた時でした。また故人の好きだった聖句としても上に書いた聖句を葬儀の時読みました。私は神学生の時に聖書朗読の指導を受けました。その時に「礼拝で聖書が読めることは幸せよ。その時に与えられた神様からのみ言をあなたを通して会衆が聴くのですから。」その言葉を聞いて神学生の奉仕だからうまくすべきと思いがちが、たまたま私の思いは変えられ、与えられている奉仕として用いられていることを知り、神様がいつも一緒にみ言葉を運んで下さることに気づくことができました。一人ではありませぬ。いつも神様が一緒です。ただ二續なのでなくあなたをお用い下さいます。聖書朗読の時だけではなくいつも神様は一緒です。

信仰という恵みを与えられていると自覚している私は、日々神への愛と信頼をもつて誠実に生き生きと過ごしたいと願いつつも実は全くそうではないと思知らされることが多々あります。ときには「私には荷が重すぎます」と職務を投げ出して逃げ出したくなることもあれば、疑いや迷いをぬぐい切れず、ふて寝して、翌日には奇跡が起きていることを願つても、相変わらず厳しい現実を前に深いため息から一日を始めることもあります。もしかしたら、この文章を読んでくださっているあなたも、思いがけないトラブル、痛み

しい現実、信じたくないような悪意、自分の力ではどうにもならない状況を前にして立ちすくんだという経験をお持ちかもしれません。マリアが聞いた「おめでとう。」の言葉も途方もなく重たいことばであつたと思ひます。にもかかわらず、彼女は自分の身に起きたことを引き受け、人生を神の働きに委ねていくようになりました。そこには「主があなたと共に」おられる。(ルカ1:28)という約束や「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六

か月になつていく。」(ルカ1:36)という御言葉の力があつたと思ひます。神の業に巻き込まれたのが自分だけではないという情報、マリアにとつて心の内をわかちあう他者がいるという安堵となつたに違ひありません。そして、エリサベトを訪ねてしばらく共に過ごした時間は彼女たちにとつて豊かなものであつたでしょう。

世界的なパンデミックが私たちの日常を激変させ、気候変動による大規模な災害が各地で起こり、軍事暴力がはびこる中、福音を語る、福音を生きていくことの難しさをひしひしと感じています。そのような中で、一つの祈り会に招かれました。きつかけは「親しい友人やその家族のために祈って欲しい」という個人的な呼びかけ。それまで、ミヤンマーという国についての知識も関心もほぼ皆無でしたが、2021年2月1日の軍事クーデター以降、毎週金曜日にオンラインで行われている祈り

会に参加するようになって、かの国で起きている暴力が私たちの生活と地続きであることを知らされました。祈り会から生まれたアトウトウミヤンマー(ミヤンマーと共に)支援という小さな支援団体では、ミヤンマー本国の支援と共に日本で生活されているミヤンマーにルーツを持つ方々とも連帯して、奉仕や運営に携わっている仲間たちに感謝しながら、祈り会でわかちあわれるそれぞれの思いに自分の思いを重ねます。リアルタイムでわかちあわれる情報の中には目を背けたくなるものも少なくありません。それでも嘆きや悲しみを押し寄せてくると沈黙に押しつぶされそうになつても、神は、どのようなときにも人の呻きや、眩きに耳を傾け、心を向けてくださっていると信じて祈り続けることのできることを信じています。

この世界にお生まれになりました。マリアも、嬰兒として生まれ、その身を人の手に委ねられた幼子の重み、ぬくもりを通して、神の業の担い手として招かれたことを感じたことでしょうか。現代は、当時とはまた違った苦しみと悩みが世界を覆つています。そのような中であつて、私たちはクリスマスをするののように待ち望んでいるのでしようか。キリストの誕生は、私たちに神の約束が必ず成就するということをお教えられる出来事です。そして、神が御心を顕されるときに、私たちが求め、働きの中に招いてくださっているということも教えてくれます。だからこそ、自信がなくとも、しんどくても、辛くても、福音を語る、福音に生かされる幸いを伝える務めに踏みとどまりたいのです。「神にできないことは何一つない。」という御言葉に立ち、すべてを「ご存知の方が、命と希望へと私たちが押し出してください。」ことを信じて。

アトウトウ ミヤンマー支援
～顔と顔が見える小規模支援～

アトウトウ(အတူတူ)ミヤンマー支援

1. 日本に住むミヤンマーにルーツを持つ方の生活相談・同行
2. 日本での安定した生活を実現する日本語学習・文化交流
3. 日本に住むミヤンマーにルーツを持つ方への緊急時経済支援
4. ミヤンマー本国の困窮者への支援
5. 情報発信

活動は、毎月の世話人会で確認し、状況にのびやかに反応し行っています。ミヤンマーのことを忘れず、祈り続け、帯を結び、繋いでいきます。အတူတူ(アトウトウ)は、ビルマ語で「共に」という意味です。

献金先
三井住友銀行 横浜駅前支店 (店番547)
普通 口座番号 8609321

名義 アトウトウミヤンマー支援代表形木さゆり

2021年8月1日にミヤンマーを覚える祈り会を開催する過程で、具体的な支援をしたいという思いを共有する300名を超える賛助者が名を挙げ、アトウトウミヤンマー支援が立ち上がった。ミヤンマーで暮らす生活を送るために必要としている具体的な支援を届けるため、献金にご協力をお願いします。設立から10ヶ月の時点で、100万円を超える献金をいただき、全て上記の支援活動に使わせていただいています。食料、医薬品、飲料などをミヤンマーへリストアップして届けています。

「ミヤンマーを覚える祈り会」
毎週金曜日 21:00~21:40

最新の情報共有の場、アトウトウミヤンマーの活動も、毎週金曜日の祈り会でお知らせいたします。アトウトウは、祈りから生まれた支援活動です。申し込みは不要です。ぜひご参加ください。

ZoomミーティングID: 859 4339 0368
パスコード: 340159

Facebook Page
アトウトウミヤンマー

共同代表
アトウトウミヤンマー(賛助)代表 形木さゆり
連絡先: a1u@uoyama.or.jp

「ルターの聖書翻訳5000年」

12月11日(日)午後2時~4時
オンライン(ZOOM)での開催です。

講演「中世後期の聖書の世界」
演奏「ルターのクリスマスの讃美歌」
シンポジウム「聖書、ルター、翻訳、そして現代」

「ルター」の聖書翻訳5000年

ルター研究所クリスマス講演会

12月11日(日)午後2時~4時
オンライン(ZOOM)での開催です。

講演「中世後期の聖書の世界」
演奏「ルターのクリスマスの讃美歌」
シンポジウム「聖書、ルター、翻訳、そして現代」

※視聴方法の詳細は各教会にお問い合わせください。



議長室から 大柴 謙治

「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光と神にあれ、地には平和御心に適う人にあれ』(ルカ2・13〜14)。

「天使の取り分」 Angels' Share」

かたむける孫と、ふたりを『守る存在』とを描いてヨーロッパを感動の渦にまきこんだ話題の絵本。見えない天使が私たちを守ってくれているのです。ボンヘッファーの『善き力にわれかこまれ』という賛美歌もやはり天使の守りを歌ったものと聞き

が...』という素敵な絵本があります(上田真而子訳、徳間書店2002)。
その扉の裏には「うれしいときもかなしいときもいつもだれかがそばにいた。あふないときにはたすけてくれた...。幸運だった一生をふりかえる祖父と、その話に耳を...」
輝き続けています。どのような深い闇も、悲しみも絶望も、神によつて与えられたイエス・キリストという希望の光を消すことはできません。もしも主の御降誕がなかったとしたらあの幾多ものすばらしいクリスマスキャロルは誕生しなかったでしょうし、私たちが天使の歌声に耳を澄ませることもなかったはず。そう思うと御子の降誕にますます感謝したくなります。キャロルにより私たちに不思議な力と慰めが与えられるからです。賛美を通して私たちもまた、天使たちの大きな喜びに参加することができているからだと思います。



「いつもだれかが...」
クリスマス!

「教会讚美歌 増補」解説



③0 創作賛美歌解説10

増補54番
「光ふる海原」

歌詞解説 木村満津子
(湯河原教会)

幼心がつき始めた頃からでしようか。青空を見上げるのが好きだったように思う。「ウミニオフネ ヲウカバセテイツテミタ イナヨソノクニ」好きな歌

を歌いながら、そのよその国へ行つてみたいと水平線をながめていた。まだ水平線との言葉を知らない頃の夏の日々。思い返すと、よその国で生を受けて、大海原を行き来していた私でした。夏の日々に憧れていたよその国はそこには見えなかった。静岡沼津市の千本浜の思い出です。大平原は、薄くれない桜草と青空をつなげ

た。それが地平線だった。終戦日から約1年、中国東北地方のチチハルの郊外での思い出です。私の中にある水平線と地平線の2線には、今、美しく静かな旋律が流れています。
曲解説 梅津美子
(日本同盟教団中野教会)
「光ふる海原」は、2011年6月19日に東京カテドラル関口教会マリア大聖堂で行われた第30

世界の教会の声

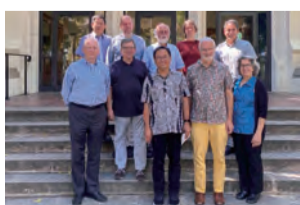
浅野直樹 Sr.
(世界宣教主事
市ヶ谷教会・スオミ教会
牧師)

ルーター派と ペンテコステ派の対話

ルーテル世界連盟(LWF)とペンテコステ派の世界組織PWF(Pentecostal World Fellowship)は、2016年にフィリピンで開始した対話をその後毎年続けています(2017年はドイツのヴァイツェンベルクで、2018年はチリのサンティアゴで、2019年はマダガスカルのアンタナリボで開催)。その後新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響で対話はオンラインとなりましたが、今年9月末にカリフォルニアのフラー神学校で対面による協議が行われ、10名の出席者たちは再開できた喜びを噛みしめました。期間中、一日の始めと終わりの祈りデイポーションは、ルーター派とペンテコステ派双方が担当しました。
今回のカリフォルニア州パサデナでの対話では、ここまで積み重ねてきた協議の総括をし



参加者らは日曜日にはペンテコステ派教会の礼拝に出席



2022年のLWFとPWFとの協議会の参加者達



この協議会には東京教会の英語礼拝と牧会を担うサラ・ウィルソン牧師が委員として出席しています。

エキシユメニカルな交わりから

⑨NCC在日外国人の 人権委員会

李明生
(田園調布教会牧師)

戦後1948年に発足した日本キリスト教協議会(NCC)の歩みは、国内外のキリスト教会のネットワークを通して対話と和解を進め、祈りを共にして連帯の実現を目指すものでした。特に在日大韓基督教教会の委員たちと活動を共にする中で在日外国人の差別の実

態に気付かされ、この問題に取り組むため1967年に「少数民族問題研究委員会」が発足します。しかしその後、その名称は日本の侵略・植民地化・強制連行の歴史を覆い隠してしまうような名称であることに気付き、1972年に現在の名称となりました。

2011年に名称を「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」(略称はそのまま「外キ協」とし、多文化共生社会の実現を目指して活動しています。残念ながら日本社会では2009年頃から「ヘイトトス・ピーチ」そして「ヘイトクライム」が繰り返されるようになりました。こうした中、2015年に世界教会協議会(WCC)をはじめ国内外の諸教会によるエキシユメニカルな協力によって第3回「マイノリティ問題と宣教」国際会議が東京で開催され、その

静岡市清水区台風15号災害報告

秋久潤
(小鹿・清水・沼津教会
牧師/東海教区台風
15号災害現地部長)

2022年9月24日(土)頃に静岡県を通過した台風15号により水害が生じました。本記事(2022年10月25日執筆)は、静岡市清水区の情報に偏っています。申し訳ありませんが、他の地域の被災情報は本記事に含んでおりません。

特定の地域に支援に出かけるのが難しいことです。お金を出せば支援物資が買えたため、ルーテル教会として支援の呼びかけはせず、東海教区災害予備費から物資購入費を出して頂きました。私は9月26日(月)から清水区の教会員を訪問し水を配りました。その後、市のボランティアに参加しています。

「本・出会い」 教会⑥

秋山仁
(ディアコニアセンター喜望の家・豊中教会牧師)

未だ日本社会に見られる外国人差別。それも国が定めた制度や公的機関において、しかも常態化しているという現実があります。

2021年3月6日、1人のスリランカ人女性、ウィシユマ・サンダマリさんが、33歳の若さで、収監中の名古屋出入国在留管理局(名古屋入管)で亡くなりました。この事件は、遺族がスリランカから来日し、真相究明を求めたこともあって、連日報道がなされ、読者の皆さんの記憶にも新しいことと思います。

味を持ち、日本でこどもたちに英語を教えたいという希望をもつて来日した女性が、「非正規滞在者」として名古屋入管に収容されたのか。なぜ、収容中に衰弱して、医療措置も受けられず亡くなったのか。なぜ、真相究明を願う遺族に全くの情報が開示されないのか。

本書の著者の一人安田菜津紀さんは、事件の経緯と背景を詳らかにしながら、こうした疑問の核心に迫っていきます。そして、そこから見えるのは、日本という国の戦前から変わらぬ続けている「出入国管理」体制全体の問題であり、その人種差

別的な体質です。本書を読み進めていくとき、私の中に湧き上がってきたのは憤りであり、また大きな疑問でした。「どうしてこんな酷いことが、法治国家であるはずの日本で許されているのか。外国人に対してこんな扱いをしている国が、外国人の労働力をあてにするのは正しいのか。」

日本にはすでに280万人もの外国人にルーツを持つ人々が暮らしており、大勢の外国人によって、繊維産業などの中小企業や農・漁業といった根幹の産業が支えられています。今や、彼らなしには日本の産業は立ち行かない状況になっていきます。にもかかわらず、日本社会は彼らに対し、まったく優しくはないのです。

本書では、このウィシユマさんの事件の他にも、様々な現場での取材をもとに、日本政府による外国人政策の問題点が赤裸々に語られています。

来日した外国人技能実習生の労働現場での処遇と実態。さらには、ここ十数年執拗に繰り返される「ヘイトスピーチ」(社会的なマイノリティに向けられた差別や侮辱、排除の言葉と排外主義の動き。その根底にある、戦前・戦中の日本「帝国」による植民地支配や侵略の事実を否認する歴史修正主義)の問題。



「外国人差別の現場」
(安田浩一・安田菜津紀著、朝日新書 2022)

なぜ、日本の文化に興

日本にはすでに280万人もの外国人にルーツを持つ人々が暮らしており、大勢の外国人によって、繊維産業などの中小企業や農・漁業といった根幹の産業が支えられています。今や、彼らなしには日本の産業は立ち行かない

状況になっていきます。にもかかわらず、日本社会は彼らに対し、まったく優しくはないのです。

私たちが、すでに「共生社会」、「多文化社会」の時代に生きています。「人権」の視点から、差別的な外国人政策を終わらせ、人種や民族の壁を越えて、互いに助け合い、共に生きてゆける社会の創出を目指さなくてはならないと、本書を読んで改めて強く思われました。



2022年09月30日撮影(清水区)公園を仮置き場にした家庭ゴミ。現在は自衛隊が撤去済み



2022年10月04日撮影(清水区)鉄道の橋桁に流木が詰まり上流側沿岸が浸水

